

序論)

「自己欺瞞」という言葉があります。これは自分で自分を騙していることを指しますが、よくあるパターンとしては、本当は自分が間違っているのに、自分は正しい、自分は間違っていないと思い込んでしまうパターンです。

例えば、ある人がとても大切な仕事を上司から任されました。ところが、その人はまだ時間的な余裕があるからと思って、その仕事を後回しにしてしまったのです。その結果、その仕事は期限に間に合わず上司に怒られることになってしまいました。しかし、彼は上司に怒られながらこう思ったのです。「こんな大変な仕事なら、もっと前もって言うてくれない上司が悪いんじゃないか。それに俺がこんなに大変な仕事をまかされたんだから、周りの人も手伝ってくれてもいいはずじゃないか。」

これが自己欺瞞です。明らかに自分が悪いのに他の人に責任転嫁して自分は悪くない、自分は正しい。そうやって間違った自己肯定をしてしまうのが自己欺瞞なのです。

なんでこんなことを言うかということ、コリントの教会の中にそのような自己欺瞞があったことを今日の箇所は教えているからです。彼らはなぜ、自分で自分を騙すようなことをしてしまったのでしょうか。そして、自己欺瞞をせず、教会が見据えるべき真理とはなんなののでしょうか。

今日は、私たちが見据えるべき教会の真理とはなにかを聖書から教えられていきたいと思います。

文脈)

まずは簡単に先週の振り返りをしましょう。

先週の礼拝では「報いのある人生」と題して、聖書から教えられました。私たちキリスト者は、キリストという確かな土台の上に建てられた者で、大切なのは、その土台の上にどのようなものを積み上げ、どのような家を建てていくのかということでした。

火の試練によっても焼き尽くされないような、【主】の御前で価値あるものを積み上げていくなら、【主】から報いを受けることができます。しかし、【主】の御前で価値のないものを積み上げ、試練によってそれが燃え尽きてしまうなら、その人は報いを受けることはできないのです。

これは私たち一人ひとりがキリストという土台の上に、どのように生きるかという個々人の責任を問う話でした。

対して、今日の聖書箇所は個人の歩みに焦点を当てたものではなく、キリスト者の群れ——すなわち教会について語られています。

1) 教会は神の宮 -その宮を壊すな- (16-17 節)

まずは 16 節を読んでみましょう。

3:16 あなたがたは、自分が神の宮であり、神の御霊が自分のうちに住んでおられることを知らないのですか。

私はこの箇所を、長らくイエス様を信じている私自身が神の宮であり、聖霊の住まいであることを示していると誤解していました。もちろん、広い意味では、このみことばは、私たち、個人個人が神の宮であり、聖霊の住まいであることを示していると理解することができます。しかし、実際の元の意味としては、私たち、個人個人というよりは、私たち、キリスト者の群れである教会が神の宮であり、御霊の住まいであることを示しています。

この 2017 版の訳も実はあまりよくありません。「あなたがたは、自分が神の宮であり、神の御霊が自分のうちに住んでおられる」という言い回しは、自分の中に神の宮があり、聖霊がおられるという理解をしやすいですが、元のギリシャ語聖書にはこの「自分が」とか、「自分の」ということばはありません。

元の聖書を直訳すると、「あなたがたは、あなたがたが神の宮であり、神の霊があなたがたのうちに住んでおられることを知らないのですか」となっています。

この直訳からもわかるとおり、このみことばは、「あなたがた」と呼ばれる教会が神の宮であり、聖霊の住まいであることをしめしています。

私達は、それぞれが神の宮なんですけども、同時に、私達全体が神の宮であり、聖霊が住んでおられるところなのです。しかも、ここでいう神の宮とは神殿全体のことを指しているのではなく、エルサレムでいうところのここ。神殿の最奥にある至聖所と呼ばれる神様の臨在があるもっとも聖なる場所のことを指しています。

みなさん、【主】イエスキリストを信じるこの群れは、まさに【主】の臨在があふれる最も聖なるところなのです。だから、私達は教会という【主】の群れを、なによりも大切にしなければならないのです。

そして、その教会を壊そうとするとどうなるのでしょうか。17 節

3:17 もし、だれかが神の宮を壊すなら、神がその人を滅ぼされます。神の宮は聖なるものだからです。あなたがたは、その宮です。

もし、私たちの中に、教会という群れを壊そうとする者がいるならば、【主】はその人を滅ぼされるとパウロは語っています。なぜなら、教会という神の宮は、【主】の臨在に満ちるべき「至聖所」として、最も聖別されなければならないものだからです。

ですから私たちは、同じ信仰を持ち、一つとなって歩んでいるこの教会という【主】の群れを、聖なるものとして——すなわち、神の宮として、御霊の住まわれる場として——何よりも大切に守り、尊重していかなければならないのです。

みなさんにとって、富川福音教会、あるいは日高キリスト教会という群れは、どのような存在でしょうか？ 「別になくてもよい」「自分が礼拝をするための場所」と考えているでしょうか？ それとも、【主】によって与えられた至聖所であり、【主】の臨在があふれるべきものとして、何よりも大切にしておられるのでしょうか。

私たちにはそれぞれ性格や賜物の違いがあり、ときには互いの弱さや足りなさに気づくこともあるでしょう。しかし、それでもなお、【主】によって与えられたこの教会を、私達はなんとしても守り、聖別していかなければいけないのです。

みなさん、私達、富川福音教会と、日高キリスト教会は、そして、【主】にある教会のすべては、聖霊と【主】の臨在があふれるべき最も聖なる群れなのです。

2) 自分を騙すな -愚かになれ- (18-20 節)

でも、コリント教会の人たちは、いままで学んできたように分裂分派を起こして教会という繋がりを大切にしてこなかったのです。だから、パウロはコリント教会の人たちの中には欺きがあり、自己欺瞞があると指摘しています。18 節を読みましょう。

3:18 だれも自分を欺いてはいけません。あなたがたの中に、自分はこの世で知恵のある者だと思う者がいたら、知恵のある者となるために愚かになりなさい。

コリント教会の人たちが持っていた自己欺瞞とは何でしょうか？ それは、自分は知恵あるものだ、自分は何が正しいかをわかっている。とそう思い込んでいたことです。実際は【主】に滅ぼされるべき間違っただけのことをしていたのにです。

彼らはパウロ派、アポロ派、ペテロ派などに分裂していました。それはまさに教会を壊すようなことです。それなのに、そのように分裂分派を起こしていた人たちの心の中には、「自分が選んだ指導者に従うことこそが正しいのだ！ 自分は正しい選択をすることができる、正しい知恵をもっているのだ！」という思い込みがあったので

す。

でも、パウロは「それは、自分で自分を騙していることであり、本当に知恵ある者になりたいならば、愚かになりなさい」と教えています。

教会を分裂させている人たちが誇っていた知恵は、あくまでもこの世の知恵でした。でも、それは神様の前では嘘でしかなかったのです。だから、パウロはそのようなこの世の知恵を捨て、むしろこの世の人たちが愚かと思うようなことを選択する人になりなさいと言っています。

みなさん、例えば私たちは献金をしますね。でも、この世の人たちは宗教にお金を使うなんて愚かなことだといえます。当然、私達が毎月、定まったお金を献金していることをこの世の人たちは馬鹿にするでしょう。もちろん、献金は毎週、司会者が語っているように強制するものではないし、それぞれが自分の心で決めるべきものですが、この世の人たちはその意味も価値もわかりません。でも、私達はあえて、この世の人たちが馬鹿にしている献金を【主】の前にささげていくのです。

それは何故でしょうか？ 十字架のことばは、滅びる者たちには愚かであっても、救われる私たちには神の力だからです。救われた私達は、この世の人たちには愚かであっても、【主】のために自分を捧げていくことの価値を知っています。だから、私達は、あえてこの世の人たちにとって愚かと思うこと、常識外れと思うことを【主】のために選択していくのです。

そして、覚えていただきたいのは、この世の人たちが賢いと思っていることは、神様の前では、愚かな事だ。 ということです。19 節、20 節を読みましょう。

3:19 なぜなら、この世の知恵は神の御前では愚かだからです。「神は知恵のある者を、彼ら自身の悪巧みによって捕らえる」と書かれており、

3:20 また、「主は、知恵のある者の思い計ることがいかに空しいかを、知っておられる」とも書かれています。

みなさん、イエス様が語られた大きな倉を建てたお金持ちの例え話を思い出してください。その人はとっても裕福な人で、ある時、畑が大変豊作でした。だから、その人が今よりももっと蓄えることができる大きな倉を建てて、「これで安心だ」といいます。でも、その後、【主】は『愚か者、おまえのたましいは、今夜おまえから取り去られる。おまえが用意した物は、いったいだれのものになるのか。』と言われたのです。そして、この例え話の締めくくりに【主】はこのように言われました。

ルカの福音書

12:21 自分のために蓄えても、神に対して富まない者はこのとおりです。」

私達は、この世の知恵として生活の為、子どもの学費のため、老後のため一生懸命、お金を蓄えます。実際にその事自体が罪というわけではないでしょう。でも、神様と歩む永遠の人生という視点でみるのならば、この世でお金をためてそれで安心するのは愚かなことなのです。私達は、この世の人生も大切ですが、【主】の前に神の国の財産を蓄えていかなければ、本当の意味で豊かなもの、真の知恵を持つ者とはいえないのです。

イエス様は神の国に財産を蓄える一つの例として、「持ち物を売り払って貧しい人たちに与えなさい。そうすれば、あなたは天に宝を積むことになります」と言われました。つまり、神様が大切にされている愛の実践をすることで天に宝が積まれるのです。

だから、私達はこの世の知恵に頼って安心することが愚かであり、【主】はその知恵だけで狡猾に生きようとする者を、その悪巧みによって捕らえられることを覚えておくべきなのです。この世の知恵は、【主】の知恵に比べるのならば空しいものです。

みなさん、本屋さんとか YouTube などを見ると、今は、色々な知恵に触れることができます。でも、それらの知恵は完全ではないのです。どんなにこの世の成功者が魅力的なことをいっていたとしても、それらと真逆のことをしている人もいます。そして、今、それが正しいと思えたとしても、科学の発展や新しい発見によって今まで正しいと思っていたことが簡単にひっくり返ってしまうことがあります。だから、この世の知恵には永遠の価値があるわけではないのです。

本当の知恵、永遠の価値がある知恵は、すべての知恵を知っておられる【主】の中にこそあります。

ですから、この世の知恵だけに頼らず、これですべてが安心だ。自分の選択は正しいなんて自分を騙すことをやめましょう。本当の真理は、この世の人たちが愚かと思うところ、【主】の御手の中にあるのです。

みなさんにとって、「この世的には愚かだけど、【主】が喜んでくださること」と言われて思い当たることは何でしょうか？ その愚かな選択をあえて選びとる者となりましょう。

3) 人を誇るな -神のものとして歩め- (21-23 節)

そして、最後、パウロはコリント教会の人に「だれも人間を誇ってはいけません」と言っていることに注目しましょう。まずは 21 節を読みます。

3:21 ですから、だれも人間を誇ってはいけません。すべては、あなたがたのものです。

パウロ派、アポロ派、ペテロ派と別れてしまった人たちは、自分が選んだ指導者こと従うべき人物であり、誇るべき相手だと思っていました。でも、パウロはそうに人を誇ることをやめなさい。と言っています。

なぜでしょうか？ それは彼らが誇っている人物は、彼らの支配者でも、所有者でもないからです。

ここでパウロは謎のことばを述べています。「すべては、あなたがたのものです。」これはどういう意味があるのでしょうか？ 22 節を読んでみましょう。

3:22 パウロであれ、アポロであれ、ケファであれ、また世界であれ、いのちであれ、死であれ、また現在のものであれ、未来のものであれ、すべてはあなたがたのもの、

22 節の最後でも改めて「すべてはあなたがたのもの」と念を押していますね。

分裂分派を起こしていた人たちが仰いでいたパウロやアポロ、そしてペテロは、別にその派閥を支配しているわけではありませんでした。むしろ、彼らはコリント教会の人たちのものだったのです。つまり、コリント教会の人たちがパウロたちに使われるのではなく、コリント教会の人たちがパウロたちを自由に使ってよいということです。

これを私達の教会に当てはめると、牧師である私がみなさんを自由に扱って良いのではなく、みなさんが牧師である私を自由に使ってください。ということです。

そればかりか、パウロはパウロたちだけでなく、「世界であれ、いのちであれ、死であれ、また現在のものであれ、未来のものであれ、すべてはあなたがたのもの」と言っています。すごいですね。世界もいのちも死も、現在も未来もすべてを自由にしているということです。

神の宮である教会は、誰かに支配されるのではなく、すべてのものを自分のものとして扱うことを許可されているのです。

みなさん、どうでしょう。「すべてのものはあなたがたのもの」だそうです。みなさんは、その委ねられたすべてのものを何に使いますか？

・・・そう、問題は【主】が教会に委ねた教職を含めたすべてのものを、何に用いるかです。教会は【主】から、教師も、世界も、いのちも死も、現在も未来もすべてを委ねられています。それをみなさんはどのように用いたらよいのでしょうか。

パウロは、その答えとして 23 節のように言っています。

3:23 あなたがたはキリストのもの、キリストは神のものです。

教会は、パウロのものでも、アポロのものでもありません。むしろ、教会がパウロたちの所有者であり、その教会はキリストのものなのです。

だから、教会は教職者を含めたすべてのものをキリストのために用いなければいけないのです。

パウロはここで「あなたがたはキリストのもの」「キリストは神のもの」というように二段階に分けて語っていますが、これはキリストが神様に劣るということではありません。キリストと父なる神様は一つであるお方です。それはイエス様が「わたしを見た者は父をみたのです」（ヨハネ 14:9）と言われたことから明らかです。

【主】イエスキリストと父なる神様は一つです。でも、キリストはあえて【主】のしもべとして、振る舞われました。

パウロは、教会の人々をそのキリストのへりくだりに倣わせるために、あえて「あなたがたはキリストのもの、キリストは神のもの」と語っているのではないのでしょうか。私達の【主】であるキリストでさえ、父なる神様のしもべとして、ご自分のいのちも死も、【主】のために用いられたのです。

そうであるのならば、そのキリストの所有物である教会が、自分に委ねられたすべてのもの、教職者も、いのちも死も、今も、未来も、すべてをキリストのために、謙遜にへりくだって用いていくべきなのではないのでしょうか。

結論)

私たちは、時にこの世の価値観に振り回され、自己欺瞞に陥り、自分の選択や考えが正しいと思い込んでしまうことがあります。けれども、聖書は明確に語ります。「あなたがたはキリストのもの」とであると。

私たちは、自分のものではなく、キリストのものです。そして、キリストは父なる神様のものです。それは、私たちの存在そのものが、神様のご計画と御心のうちにあるということです。だからこそ、教会は分裂や対立によって壊してはならない「神の宮」であり、神様の臨在が宿る最も聖なる場所なのです。

この地上で、私たちは限られた時間と資源を持ち、それぞれに違いがあります。しかし、そのすべては【主】から教会に委ねられたものです。教会は、パウロでも、アポロでも、ケファでも、牧師でも、自由に用いていいのです。そして、その委ねられたすべてのものをキリストのために用いていく。それが教会なのです。

ですから私たちは、もはや人を誇ることなく、自分の知恵やこの世の知恵に頼るのではなく、ただキリストに目を向けて歩みましょう。教会が神様の宮であり、聖霊の住まわれる場所であるという事実を心に刻み、この群れを互いに愛し合い、キリストのために守り通していきましょう。

そのために、私たちはこの世的には「愚か」と言われることをあえて選びながら、キリストが喜ばれることを実践し、真に知恵のある者として歩んでいきたいと思えます。

「あなたがたはキリストのもの、キリストは神のものです」——このみことばに立って、へりくだって仕え合い、【主】の栄光を現していきましょう。

★応答のとき

「わたしたちはキリストのもの」——このみことばを心に刻みながら、しばらく静かに黙想し、自分自身の応答を祈りのうちに思い巡らしましょう。

- ・わたしは、教会という【主】の宮をどのように見ているでしょうか？
- ・この世の知恵に頼りすぎて、【主】の前に愚かさを選ぶことをためらってはいないでしょうか？
- ・キリストのものとして、自分に委ねられているものをどのように用いているでしょうか？

【主】の御前に静まり、御霊の促しに答えて、自分なりの応答を週報の「わたしの応答」欄に記していきましょう。